

シチリア・ノートの1693年ヴァル・ディ・ノート大地震からの復興-移転再建をめぐって

正会員 ○岡北 一孝*
 会員外 田中 傑**
 正会員 稲益 祐太***

震災復興 シチリア 17世紀
 ヴァル・ディ・ノート ノート アーヴォラ

はじめに

1693年1月9日と11日に、シチリア島南東部のヴァル・ディ・ノート地方を大地震が襲った。マグニチュードは最大7.4とも言われ、多くの街が壊滅的な被害を受け、犠牲者の数は膨大であった。それぞれの街は地元の貴族やスペイン王国からの支援を受けて震災から見事な復興を遂げた。

再建事業は、A. 現地再建(32例、参考文献3による。以下同様)、B. 移転再建(4例)、C. その2つの複合的再建(2例)に分けられる。つまりほとんどの都市は場所を変えずに、再建を進めていった。一方で、本稿で扱うノートやアーヴォラのように、もともとの街を捨てて、数km離れたところに新しい土地を求め、一から都市を建設した例がある(図1、図3)。複合的再建の事例としては、ラグーザが挙げられる。その街はラグーザ・イブラとラグーザ・ヌオーヴァ(ラグーザ・スーペリオレともいわれる)の2つの地区に分けられるが、ヌオーヴァは文字通り、地震の直後に住民たちによって建設された新市街地である。しかしながら旧地に残った住民によって、イブラも再建が進められたために、現在のような複合的な都市が形成された。

これらの中でも、カターニア(A)、カルタジローネ(A)、モディカ(A)、パラッツォーロ・アクレイデ(A)、シクリ(A)、ノート(B)、ラグーザ(C)、ミリテッロ・イン・ヴァル・ディ・カターニア(C)の8つの街は、バロック様式の建築によって統一のとれた再建後の街並みが評価され、2002年に世界文化遺産となった。

本研究では、その中でも移転再建の事例、とりわけノートに着目する。中世都市から近代都市へと変貌したノートは、都市のかたちは全く異なる。この再建において過去の継承は全くなされなかったのだろうか。新たな都市を別の場所に建設するにあたり、住民の間でどのような議論があったのか、廃墟と化した街とどのように結びつこうとしたのかを考察していく。本稿はその出発点として、移転の経緯について整理する。

ノートの復興に向けて-現地再建か、移転再建か

ノートの旧市街(ノート・アンティカ)は現在の街の北西約7kmに位置する。海岸から離れた山の中の要塞のような都市で、農産業によって栄えた非常に豊かな街でもあった。街の起源は古代ギリシアにまで遡り、中世にはアラブ人たちによってヴァル・ディ・ノート地方の中心都市と定められた。地震が起こる直前には、人口が12000人ほどであったと考えられ、その規模はシラクーザやカターニアと同程度にまで大きかった。いまは廃墟と化しているが、古代ギリシアにさか

のぼる遺跡や住居跡もあり考古学的な価値も高い。

その都市のかたちは、丘や山のなど高地にある中世都市、すなわちアッシジやオルヴィエートやラグーザ・イブラのような都市と共通する部分が多く、険しい土地の形状によってかたちづくられた自然と人工が混淆する美しい都市であったと考えられる(図2)。

現在のノートは斜面に位置し、街中には非常に坂が多い。大聖堂や市庁舎が位置する平坦な中心部がまず計画され、そこから坂を登るように街が広がっていった。とはいえ旧市街に比べればかなり平坦な土地であり、海岸にも近い(海岸線から約5km)。こうした場所が求められたのは、貿易の拠点となる港に近いことが街の経済的繁栄のためには有利であったからだと考えられている。山岳地や海のすぐそばも候補地であったが、農業に適した土壌かどうかや、都市防衛の観点や利権争いから現在の土地が選ばれた。しかしながら移転が市民の総意として問題なく進んだわけではなかった。実際、かなりの数の住民が街の移転には反対していた。庶民はとどまることを望み、貴族階級の人々は逆であった。ノートのみならずシチリアを支配していたスペイン政府もまた、ノートの移転を推し進めていた。政府側としては、40ほどの都市の再建を主導しなければならず、資金面からも山岳地にある要塞都市の現地再建による再生には難色を示していた。

1693年から1702年までの論争

新しい都市への移住が始まったのは、1693年の5月から6月にかけてであり、スペイン政府の役人で、再建事業の責任者であったジュゼッペ・アスムンド(Giuseppe Asmundo)はノートの守護聖人であるサン・コッラードの聖遺物を旧市街から持ち出し、「あの廃墟に戻ることはない」と明言していた。しかしながら、新天地は山の中よりも熱く湿気が多いため、移住が始まって早々にマラリアやペストが流行りはじめた。3000人近くが犠牲となり、これも住民たちの移住先での生活に不安を抱かせる点であった。

1698年には旧市街に戻る声が高まり、住民による投票決議が行われた。747の票のうち266が新天地を支持し、481が旧市街地へ戻ることを求めた。農民や職人などの多くの住民たちは昔の街への帰還を主張し、貴族や聖職者、医者や弁護士たちはメーティを支持した。有力貴族の中でもアントニーノ・インペリッツェリ(Antonino Impellizzeri)は、故郷を取り戻すべく立ち上がった庶民を支持していた。アントニーノを動かしたのは元の場所へ戻りたいという熱烈な思いではなく、移転を推進したランドリーナ家というライバル貴族に対する怨恨にも似た感情であった。

決定的な打撃を受けたノート・アンティカの住民が、街をそこで再建するのは難しいと実感していたのは確かであろうが、強固な要塞都市という性格と豊富な農作物が育つ豊かな土壌、そして地域の商業の中心的存在であるという自尊心もまた捨てがたかった。それゆえに都市が二つに分裂する可能性もあったのだが、最終的にはスペイン政府が押し切る形で、現在のノートが成立した。こうした経緯は、アスムンドとスペイン副王であったカマストラ公との書簡など多くの資料によって詳細を知ることができる。

ウィトルーウィウスからカターネオとスカモッツィへ

住民たちが指摘していた都市の防衛という新天地の問題は、地震直後から移転再建が始まった幾何学都市アーヴォラによって解決に向かう。アーヴォラはノートの東北東に約 4km、海岸線にかなり近いところに定められた六角形平面の要塞都市である。1693 年の地震からの復興都市で、このように幾何学形で構成された事例は珍しく、他にはグランミケーレが有名である。旧市街地はノートと同様に、5km ほど内陸に入った山岳地にあった。2 つの新たな都市が近接することで、アーヴォラがノートの防衛機能も果たしている。このように幾つかの都市を関係づけて建設することで、再建費用の節約をスペイン政府は狙っていた。

アーヴォラやノートの再建計画を策定したのは、アンジェロ・イタリア (Angelo Italia, 1628-1700) というイエズス会修道士でもある建築家である。イタリアはパレルモで教育を受け、カターニアやリカータ、パルマ・ディ・モンテキアロなどのシチリア諸都市で教会堂建設に携わった。1693 年の地震以降は震災復興における都市計画者として、アーヴォラとノートに関わった。アーヴォラの計画には、カターネオ (Pietro Cataneo, c.1510-c.74) やスカモッツィ (Vincenzo Scamozzi, 1548-1616) が建築書の中で論じた都市からの影響が強く見られ、街の形態はルネサンスの理想都市の系譜である (図 3、図 4)。これはノートにおいても同様で、きらびやかなバロック建築群の舞台となる街路空間や広場やモニュメントの配置構成などは、むしろルネサンス的といえるだろう。

旧市街を支持する人々は、ウィトルーウィウスが『建築十書』第一書で都市の要件として述べるような、安全性が高く健康的であるのはアンティカであると主張した。資料にウィトルーウィウスの名前は現れないが、それが理論的根拠であった可能性は高い。そうした主張に対する反論として、ウィトルーウィウスの理論を近代化したカターネオやスカモッツィが都市計画の基盤とされたのではないだろうか。

おわりに

ノートやアーヴォラの都市構造の特徴を明らかにするためには、他の震災復興都市との形態比較、さらには建築家イタリアや 17 世紀シチリアへのルネサンスの建築理論の伝播について詳細な分析を行わなければならない。また過去の継承という観点では、旧市街のモニュメントなどからのマテリアルの再利用についても調査する必要がある。それについては今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、旭硝子財団による平成 27 年度助成研究「シチリア島における災害復興とサステナビリティ -17 世紀以降の 5 つの地震災害に着目して-」(研究代表者: 田中傑) による成果の一部である。またノート市図書館には資料調査で多大なご協力をいただいた。財団や現地行政の支援に心より御礼申しあげる。

参考文献

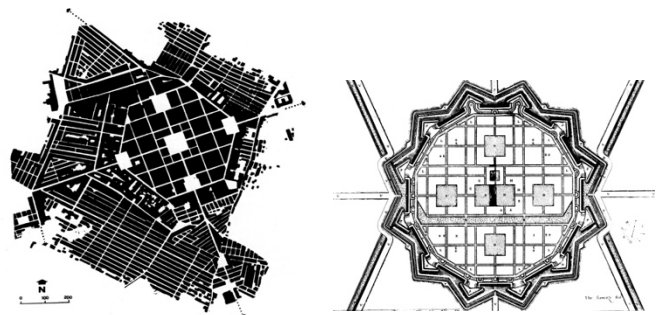
1. Stephen Tobriner, *La Genesi di Noto*, edizione italiana a cura di Corrado Latina, Bari, Dedalo, 1989.
2. Liliane Dufour and Henri Raymond, *Dalle Baracche al Barocco La Ricostruzione di Noto Il caso e la necessità*, Palermo, Arnaldo Lombardi, 1990.
3. Salvatore Boscarino, *Sicilia barocca, Architettura e città 1610-1760*, Atlante fotografico di Melo Minnella, Revisione e nota a cura di Marco Rosario Nobile, Roma, Officina, 1997.
4. Henri Raymond and Liliane Dufour, *1693: Val di Noto, la rinascita dopo il disastro*, Palermo, Sanfilippo, 2003.
5. *Frammenti medievali, Da Noto Antica al Museo Civico di Noto*, a cura di Lorenzo Guzzardi e Maria Mercedes Bares, Siracusa, Emanuele Romeo, 2010.



図 1: 現在のノート市街中心部 (参考文献 3)



図 2: ノート・アンティカの地図 (18 世紀後半制作、参考文献 2)



左-図 3: アーヴォラ (参考文献 3)

右-図 4: スカモッツィによる理想都市 (Vincenzo Scamozzi, *La idea dell'architettura universale*, Venezia, 1615.)

* 日本学術振興会特別研究員 PD

(大阪大学大学院文学研究科) 博士 (学術)

** 東京大学大学院工学系研究科 客員研究員 博士 (工学)

*** 法政大学エコ地域デザイン研究所 兼任研究員 修士 (工学)

* JSPS Research Fellow, Graduate School of Letters, Osaka Univ., Ph. D.

** Visiting Scholar, Graduate School of Eng., The Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

*** Research Affiliates, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei Univ., M. Eng.